

イチゴ空中採苗における施肥反応の品種間差異

福島県農業試験場野菜部

平成13年度福島県農業試験場試験成績概要

1 部門名

野菜－イチゴ－施肥法－品種

分類コード 03-07-02130100

2 担当者

大越聡

3 要旨

- (1) イチゴの空中採苗法における親株の肥培管理法として、定濃度の養液を与える場合、EC0.5dS/mの養液を株あたり1日2回、各200ml施用する方法が適当であった。
- (2) 「女峰」、「とちおとめ」及び「ピーひやらどんどん」を供試し、養液濃度と子苗発生数との関係を調査した結果、いずれの品種も同様に、子苗数はEC0.5dS/mまで増加、EC0.5dS/m以上ではほぼ同数となり、施肥効果はEC0.50区で最も高くなった。このことから、(1)の結果は品種に関係なく適応することが明らかとなった。
- (3) 給液濃度が同じ場合の発生子苗数を比較すると、「女峰」と「ピーひやらどんどん」はほぼ同数であったが、「とちおとめ」は他の2品種に比べて明らかに少なかった。いずれの濃度でも同様の傾向を示したことから、子苗発生の難易は品種特性と判断された。
- (4) 供試品種「女峰」、4月上旬親株定植、7月中旬仮植の条件で試験した結果、これらの方法で得られた子苗数は親株あたり45株で、一般に土耕栽培で得られる子苗数と同等であった。また、この場合の窒素施用量は1日あたり30mg/株と推定された。
- (5) 施肥反応に品種間差がないことから、子苗の発生しにくい品種で必要な子苗数を確保するために、親株数を増やすか、親株の定植時期を早める必要がある。
- (6) 試験は閉鎖系のシステムを使用して実施しているため、かけ長し方式のシステムでは施肥量を増加する必要がある。

4 その他の資料等

なし